説教20221211イザヤ65：17-25ヨハネ3：22-30「あの方は必ず栄え、私は衰える」

先週、この教会を設計して下さった黒田設計士と施工業者さんたち、そして林兄が教会入口の扉の金具を調整して下さって扉の開け閉めが、今日の様にスムーズにできるようになりました。作業が終わってから私も扉を開け閉めしてみましたら、「こんなにスムーズに開け閉めできるなんて、何という喜び！」という感じで、大変喜んでいました。

彼らのしてくれたことは、将に、『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』と荒れ野で叫ぶ者の声に応えるような業でありました。なぜならば、彼らは、この主の会堂に通じる入口の道を整えて下さったのですから。こうして、彼らに感謝することが出来ましたが、同時に、彼らにクリスマス礼拝のチラシを配って、しっかりクリスマスへの道も示しておきました。この様に、その時は自然体で喜びの受け渡しができたのですけれども、喜びというのは、この様に受け渡されることだと思います。

例えば、生まれたばかりの赤ちゃんは、何も持たないでも自分の存在そのもので、両親に喜びを与えることが出来ます。そして、両親はその赤ちゃんを成長させるために様々な物事を分け与えて、赤ちゃんに喜びを与えることが出来るのです。

この様に、人間は喜びの受け渡しを自然体ですることが出来る時もありますが、世の中を見ていきますと、やはり、人間の罪の部分が露わになって罪によって覆われてきて、喜びの受け渡しではなくて、苦しみの受け渡しをしてしまっているケースも多いのです。

最近、「世の中がつらい」といって絶望していまう方々が増えてきました。もう人間だけによる喜びの受け渡しは、困難、というケースも増えています。私たち人間は、こういった今だからこそ、聖書の御言葉に寄り頼んで、すがりつくことが出来るのだと思います。

ヨハネによる福音書3章 27節

「天から与えられなければ、人は何も受けることができない。」この御言葉の通り、天から与えられなければ、人は喜びを受けることができないのです。

たとえ人が人に喜びを与えるにしても、それが神様の喜びに根ざしていないことには、本当の喜びにはならないでしょう。

例えば、此のところ７時のニュースのトップで、日本のサッカーチームが世界大会で勝利した事実を報道して、それが、あたかも日本国中全国民の喜びであるかのような語り口でありましたが、残念ながら、そのようにマスコミや国家がいくら喜びを作り出そうとして煽っても、そのような喜びははかなく、やがてはしぼんでしまう一時の熱狂でしかないのです。

それでは神様の喜びに根ざしたまことの喜びとはどういうことなのでしょうか。その有様が、今日のイザヤ書に記されています。

見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。初めからのことを思い起こす者はない。それはだれの心にも上ることはない。

代々とこしえに喜び楽しみ、喜び躍れ。わたしは創造する。見よ、わたしはエルサレムを喜び躍るものとして／その民を喜び楽しむものとして、創造する。

彼らは家を建てて住み／ぶどうを植えてその実を食べる。

狼と小羊は共に草をはみ／獅子は牛のようにわらを食べ、蛇は塵を食べ物とし／わたしの聖なる山のどこにおいても／害することも滅ぼすこともない、と主は言われる。

この有様は、最後のキリストの国で私達が味わう暮らしのことが記されていて、未だこの地上で暮らしています私たちにとっては幻のようなことでありますが、それでもキリストを信じてその道を歩む者は、間違いなくこの国に入ることが出来るのです。又、そればかりではなく、この地上で目の前に続くキリストの道を歩んでいても、私達は、冒頭に申し上げましたような、キリストに根ざした喜びを味わうことが出来るようにされているのです。キリストに根ざした喜びというのは最初は小さな物事かも知れませんけれども、私達がキリストに祈り願いながら行う時に、その小さな喜びは何百倍にも膨れ上がることでしょう。

今日のヨハネ福音書の箇所には、洗礼を受けた人々のことが記されています。洗礼というのは、言うまでもなく、私達がキリストの道を歩み始めるにあたって、そのことをキリストから祝福されて、聖霊を受けることです。又、洗礼を受けたことを隣人たちに証しするために洗礼式を行うのです。

しかし、洗礼を受けた人たちの中には、ヨハネのもとに来て、「ラビ、ヨルダン川の向こう側であなたと一緒にいた人、あなたが証しされたあの人が、洗礼を授けています。みんながあの人の方へ行っています。」と言う人たちもいました。「みんながあの人の方へ行っています」という言葉は、明らかに嫉妬から出てきた言葉です。つまり、この人たちは、次の様に思ったのでした。我々はこの偉大な洗礼者ヨハネから洗礼を受けたのに、後からやって来たイエスが、大きな顔をして、隣りの土地で洗礼を多くの人に授けているとは許せない。ここは一つ、先輩預言者であるヨハネに後輩イエスをたしなめてもらおうと。

この様に、語りますと、この嫉妬深い人たちは本当になっていない、イエス様を神と思わず、ただの人と思っているとは、ということになりますけれども、実は、私達も十分注意していませんと、イエス様が神様であることを忘れて、ただの人であるかのように思ってしまう罪に陥らないとも限らないのです。

私たちに洗礼を授けて下さるのは神様であるイエス様です。確かに牧師たちは、実際に洗礼志願者に手を置いて、洗礼を授けはしますが、それはその役目をイエス様から言われて代行しているのに過ぎないのです。私なんかにすれば、この洗礼者ヨハネの時代の様に、まだイエス様がこの地上に居られて、すぐ隣の土地でイエス様が自ら洗礼を授けているとしたら、そんな喜びはないのです。すぐさま、私は洗礼志願者をイエス様の処へと連れていくことでしょう。

しかし、人間の嫉妬心と言うのは恐ろしいものです。一度その嫉妬心が自分の中に膨らんでしまいますと、どうしてもこの自分の手で多くの人たちに洗礼を授けたい、自分が実績を残したいという思いに駆られてしまうのです。そのような牧師を、イエス様は隣でどのように見ておられるでしょうか。また悪い癖が出たかと、苦笑いをされているかもしれません。

それに比べて、この洗礼者ヨハネという人はまことに謙遜であり、嫉妬心からは程遠い人でありました。ヨハネはイエス様について、「その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない」と語って、最初からイエス様にへりくだっていた人でした。そして、神様であるイエス様がヨハネから洗礼を受けるために来られた時も、「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか。」とヨハネが言ったのに対し、イエス様が「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。」とお応えになったので、ヨハネはお言葉のとおりに、イエス様に洗礼を授けたのでした。

さて、今の時代、イエス様はすでに、天に昇られ、父なる神の右に座しておられますので、すぐ隣の土地でイエス様が自ら洗礼を授けているということはないのですが、その代わりに、牧師に召された人たちが、この地上で分担して人々を主イエスの洗礼へと導く働きを担わされているのです。

ヨハネ福音書の箇所では、私達が洗礼を受けてキリストに結ばれる喜びを、結婚に喩えて言い表しています。キリストが花婿であり、教会員である私たちクリスチャンは一人ひとりがそのキリストの花嫁なのです。このたとえは、皆様ご存知のように、聖書の中であちこちに出て参りますし、古来からのユダヤ人社会の中でも、主なる神と人間との親密さを言い表すたとえとして語られてきたのでした。

さて、結婚式での主役は、言うまでもなく花嫁と花婿であり、介添え人は、主役ではありません。このたとえでほのめかされているのは、もし、この介添え人が、花婿に嫉妬して、花嫁を奪おうとする悪い心を抱いたらどうなってしまうのか、ということです。それは勿論、今の世でよく見られる不倫という関係の中でも最悪の関係に進展しないとも限らないでしょう。

介添え人は、わき役ではありながら、花婿から託された役割は重くて、やりがいがあることです。介添え人は花婿と花嫁が結ばれるように、心を尽くして力を尽くして奉仕していくことになるでしょう。そうしてその役割を果たすことができれば、その時、この介添え人は花婿の声を聞いて大いに喜ぶものとされるのです。

さて、この世でキリストの道を歩んでいる、私たちクリスチャンも主役ではなく、いわば脇役であります。主役はイエス様であります。いや、先の結婚のたとえからすれば、クリスチャンと言うのは一人一人がキリストの花嫁なのだから、花嫁として主役なのではないかという声が聞こえてきそうですが、それもそうですが、この花婿と花嫁の関係が完成するのは、新しい天と新しい地が創造されるときであると見た方が良いでしょう。

私たちが介添え人の立場から、晴れてキリストの花嫁となるまでには、十字架の死を経なければなりません。これを聞いて、多くの方々が洗礼を受けることをためらってしまわれるのかもしれませんが、それでも、私達は、必ず十字架を通ることになるキリストの道を歩まない限り、永遠の喜びに満ちた新しい天と新しい地へと入ることが出来ないのです。

今日の説教題にしました、ヨハネ福音書３章30節、新しい聖書訳になりますが、「あの方は必ず栄え、私は衰える」は、私達が日々、それることなくキリストの道を歩んで行くにあたって、励ましにも喜びにもなる御言葉であります。私たちはこの世で草花の様に、日々、肉体の衰えを感じながら、十字架の死へと確実に歩んでいる者たちであります。しかし、そんな地上での私たちの歩みには、キリストからの小さな喜びが与えられ続けます。それはキリストの介添え人としてそれぞれに与えられた役目を出来る限り果たしていくという喜びです。そして喜ばしいことに、私達の将来の花婿イエスキリストは決して衰えることはなく、いつも栄えていて下さる方です。

そのような、栄えの主イエスと共に十字架を潜り抜け、とこしえに喜び躍る新しい大地で、キリストの花嫁として迎えられるその日を待ち望みながら、私達は今この時を過ごして参りましょう。

父なる神よ

父なる神よ、あなたは御子イエスを通して、花婿と花嫁のたとえを語られました。その情愛と信頼とに満ちた関係をこの苦難に満ちた世の中の内に取り戻して下さい。そして、十字架の先にある喜びに満ちた新しい天地に入るために、私達をあなたの洗礼へと導いて下さい。

私たちはこの世にあって未だ、鏡におぼろに映ったものを見ているだけですが、顔と顔とを合わせて見ることになるその時に、あなたの御顔を喜びをもって見ることが出来ますよう、私達をあなたの愛の内に育んで下さい。

喜びの種は、この地上にあなたによってそこかしこにまかれています。私たちがその小さな種を見過ごしたり、疎かにすることなく、大切に育てていくことが出来ますように。

私たちが、偽りの喜びに翻弄されることなく、素直な気持ちでクリスマスの喜びを隣人たちに告げ知らせていくことが出来ますように。

父と聖霊